



愛知県立大学学生ボランティア活動への支援

副学長・東日本大震災復興支援委員会委員長 鎌倉 やよい

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災は、3 年目を迎えた平成 25 年度においても、大きな爪痕を残したままであった。かつて賑わいのあった港町、そこに住む人々の生活は、津波によって流されたまま、空白の平原となっている。福島原子力発電所の事故もまた、汚染水の貯蔵タンクは増え、漏水の問題も報道されている。放射能による住宅地の汚染も解決することなく、多くの人々が避難生活を余儀なくされている。被災地では、3 年目を迎えても、一人ひとりの大切な日常が戻ってきているわけではない。

多くのボランティアが被災地を訪れ、本学の学生たちも同様に、復興支援に貢献している。ボランティア活動は、災害を目の当たりにして、何か自分にできることはないかと自問し、手を差し伸べることから始まる。現在、南海トラフ地震の発生が懸念され、一旦引き起こされれば、巨大地震となり甚大な被害となることが既に予測されている。即ち、今は援助することができる立場であっても、誰もが被災者となる可能性を含んでいる。復興支援ボランティア活動に参加することによって、災害とその支援を考える機会となることは、意義あることである。

私たちは、いつもと変わらぬ日常生活があり、当たり前のように電気や水を使うことができ、人が自然をもコントロールできるような錯覚に陥りがちである。当然のことながら、人間も動物も地球によって生かされているのであり、地球という前提があって人の社会は成立するのである。その意味から、自然に対する畏敬の念と、自然が地球上に生きる人間や動物を守ってくれるように共生する人の知恵が重要である。そして、今の私にできることは何かと問いかけて、小さくとも第一歩を踏み出すことが必要である。本学では、今年度にボランティアステーションを開設し、学生による運営が始まった。何とか船出したところであり、これからの活動を見守っていきたい。

本報告書は、愛知県立大学における平成 25 年度の学生ボランティア活動をまとめたものである。第 1 部は東日本大震災復興支援委員ボランティア報告であり、第 2 部は地域ボランティア報告である。この 1 年間の学生達の生き生きとした活動を報告し、さらに活性化されることを願っている。



学生のボランティア活動

地域連携センター長 戸田 尚宏

地域連携センターでは平成 21 年より学生のボランティアグループの活性化を目指してシンポジウムを開催してきました。3 回目のシンポジウムにあたる平成 23 年は東日本大震災という未曾有の災害が日本を襲った年でした。本学としては震災復興支援に岩手県立大学が中心になって組織された夏銀河 2011 のプロジェクトに学生を派遣するかたちで協力をし、夏休みの間に 2 度にわたりバス 3 台で 77 名の学生を岩手へ送りだしました。その後、平成 24 年度には 72 名、本年度には 27 名の参加があり、大学としては交通費等の支援を行いました。同窓会からも支援を頂いております。

震災復興支援活動に参加した学生たちは、そのボランティア経験から実に多くのことを学び、自分達を取り巻く周囲の状況に考察を巡らし、具体的な行動に発展させていく事に活かしていったのです。新たにボランティアグループを立ち上げた学生や先輩から引きついできた活動の輪をさらに広げようとする学生たちが今までになかった様々な方法で交流し互いに刺激し合うことで、積極的にボランティア活動に関わろうとする仲間の学生を増やしてきました。

こうした活動の中で、高まりゆく意識を持った学生の要望に沿う形で平成 25 年 5 月、新緑の中、「ボランティア・ステーション」が新食堂 2 階の一角に設置されました。学生達自身の手による運営という、学内でも特色ある形態を持っていますので、現在もその役割を明確化する努力がなされています。

こうした学生の活動を地域連携センターのひとつの事業として記録するだけではなく、より多くの方に知ってもらうために、ボランティア報告書・地域ボランティア報告として学生たちの軌跡を残すこととしました。

目 次

第 1 部 東日本大震災復興支援ボランティア報告	
I - 1 平成25年度東日本大震災復興支援の方針	
(1) 復興支援の方針 -----	6
I - 2 復興支援委員会の活動	
(1) 復興支援委員会の組織 -----	7
(2) 復興支援委員会のボランティア活動支援の具体的指針-----	7
I - 3 連携するボランティア活動支援の団体	
(1) NPO法人いわてGINGA - NETとの連携 -----	7
(2) 学内における連携-----	9
II 東日本大震災復興ボランティア活動支援	
II - 1 ボランティア説明会の開催	
(1) いわてGINGA-NETプロジェクト説明会 -----	10
II - 2 学生ボランティア活動支援の実際	
(1) 大学としてのボランティア学生の把握-----	12
(2) 参加学生への経済的支援と全学同窓会からのサポート-----	12
(3) 参加学生氏名 -----	13
III 東日本大震災復興ボランティア活動報告	
報告会情報 -----	48
(1) 看護グループ -----	17
(2) 第 1 期グループ -----	21
(3) 第 2 期グループ -----	27
(4) 第 3 期グループ -----	31
(5) 第 4 期グループ -----	38
第 2 部 ボランティア・ステーションについて	
ボランティアステーションの設立と活動について-----	48

第3部 地域ボランティア報告

I	ボランティア促進プロジェクト報告会状況	52
---	---------------------	----

Ⅲ ボランティアグループ紹介

(1)	とびねこ	53
(2)	スクールボランティア	56
(3)	リニモ沿線合同大学祭実行委員会	59
(4)	ボランティア・ステーション	61

お問合せ先・編集発行

第1部 東日本大震災復興支援ボランティア報告

I 平成 25 年度東日本大震災復興支援の方針

I-1 東日本大震災復興ボランティア活動支援方針

平成 23 年 3 月 11 日午後、ゼミの最中にゆっくりとした揺れが繰り返し長く続いた。これは尋常ではないと予感した。テレビをつけると津波が家を流し、畑を襲っていた。あまりの光景に、テレビの画面を直視することができなかった。

学生たちからは、何か自分たちにもできることがあるのではと、ボランティアとして被災地に参加したいとの声が聞こえてきた。しかし、被災地の現状を考えると、学生を派遣するにはあまりにも危険であると考えられた。そのため、大学は 5 月の連休を前に、ボランティアに出向くことは時期尚早であり自粛してほしい旨を通知した。

その後、公立大学協会として岩手県立大学を中心に協働することとなり、本学は岩手県立大学が主催する岩手 GINGANET プロジェクトのボランティア活動に派遣することを決定した。緊急的に大学は専用のバスを準備し、また滞在費を同窓会の支援を得て派遣し、学生たちは被災地に開設されたサロンで、新たなコミュニティを形成することに貢献した。

平成 24 年度には、1 年が経過したこと、ボランティア活動の本質を考えると、大学がすべてを支援することへの躊躇があり、交通費を支援することとなり、以下に示す東日本大震災復興支援の方針を、学長方針として、第 1 回教育研究審議会（2012 年 4 月 23 日）において確定した。

平成 25 年度においても、その学長方針に則り、交通費を支援することとした。

平成 24 年度の東日本大震災復興ボランティア活動支援方針

1. 今年度の震災ボランティア活動への参加は、学生の個人参加とする。
2. 夏休み前の適切な時期に、関係のボランティア団体や実際の活動に必要な情報並びに大学の支援策等に関する説明会を開催する。
3. 夏休み後の適切な時期に、活動に参加した学生や教職員等を交えた意見交換会を開催し、学生の経験を共有する場を設ける。その成果は、報告書等として公表する。
4. 必要な場合には、参加学生のために特別な相談体制を整備する。
5. 学長は、必要且つ適切と判断した場合、下記の要件を具備する学生に対して、一定範囲の経済的支援を行う。
 - ① 大学の指定した団体の活動に参加していること。
 - ② 今年度内に実質的に 5 日間以上活動に参加していること。
 - ③ 団体から発行された活動の証明書を提出すること。
 - ④ 大学所定の活動記録を提出すること
6. 上記の業務を遂行するために、学長の下に、副学長、地域連携センター長、学生支援センター長、事務部門長及び学長の指名する者で構成する「復興支援委員会」を設置する。
7. 関係事務は、基本的に研究支援・地域連携課が担当する。

I-2 復興支援委員会の活動

(1) 復興支援委員会の組織

平成 24 年度第 1 回教育研究審議会（2012 年 4 月 23 日）において、学長の下に、副学長、地域連携センター長、学生支援センター長、事務部門長及び学長の指名する者で構成する「復興支援委員会」を設置することが周知された。

平成 25 年度のメンバーは下記のとおりである。

(敬称略)

復興支援委員会委員長	副学長	鎌倉 やよい
委員	地域連携センター長	戸田 尚弘
委員	学生支援センター長	人見 明宏
委員	事務部門長	北條 泰親
委員	教育福祉学部 准教授	松宮 朝
委員	看護学部 教授	佐久間 清美
委員	学術情報部長	秋田 敏
委員	地域連携・学術情報課 主事	三宅 貴子
委員	地域連携・学術情報課 主事	大田 なぎ砂

(2) 復興支援委員会のボランティア活動支援の具体的指針

平成 23 年度・平成 24 年度の活動を繋ぐことを目指し、平成 25 年度の指針として、5 項目を掲げる。

- ① 復興支援団体は多く存在するが、大学として学生を派遣することができる団体について、限定して情報提供する。
- ② 経済的支援として交通費（往復）を支援する。
- ③ 事前説明会へ参加することを求め、事前に心構えなど準備を行うように導く。
- ④ ボランティア参加中は 1 日の振り返りの記録を行い、気持ちを整理するよう求める。
- ⑤ 事後の報告会へ参加することを求め、経験を共有することで気持ちを整理し、問題解決の方向性を見いだすように導く。

I-3 連携するボランティア活動支援の団体

(1) 岩手 GINGA-NET との連携

本学が学生に指定する東日本大震災復興支援ボランティア団体を調査することを目的に、平成 24 年度岩手県立大学を訪問し、同大学が、「いわて GINGA-NET」の活動をどのようにサポートしているのか、具体的な活動に関する情報を得た。

また本年度は、同大学内に設置された学生ボランティアセンターの、特定非営利(NPO)法人いわて GINGA-NET 八重樫綾子代表より情報を得て今回の活動について詳しい情報を得ることができた。

1) 「いわて GINGA-NET」の活動

これまでボランティア活動に参加してきた八重樫綾子さんを代表として、「いわて GINGA-NET」は設立された。学生ボランティアセンターに本拠地を置き、情報発信を行っている。「いわて GINGA-NET」が窓口となり、現地センター（陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町、宮古市）からの要望を受けて、学生の派遣が実施されていた。

震災から2年が経過し、自治組織が形成された仮設住宅もあり、具体的な支援要請やこどもの学習支援などの要望がある。また、漁業支援などの要望もあるとのこと。そのような個別の活動内容はすべて GINGA-NET が把握する体制であった。

2) 平成 25 年度のボランティア学生募集

ボランティア学生の受け入れ人数は、夏 GINGA (8/21-9/23) では延 300 名が予定されていた。現地の拠点は一か所とし、拠点から各仮設住宅までの移動は GINGA で手配するバス利用が検討されていた。また、寝具を準備できないので、各自が寝袋を持参する必要があった。病気発生時には、拠点から車で搬送できる体制が予定されていた。

また、活動を評価するための振り返りシートを GINGA-NET で準備しているため、これを大学へ提出する報告書として使用することが可能であり、修了証の発行も可能であるとのことであった。マスク、ティッシュポ手袋などの必要物品については、基本的に GINGA-NET において準備がなされる予定であった。昨年度同様、学生自身が活動を意味づけることが重要であった。今年度も、初日にオリエンテーションを行い、ボランティアに関することで何か相談がある場合は常時スタッフが対応し、初めて参加する学生でも十分な活動が行えるようなサポート体制が構築されていた。

学生 1 人が参加するときの必要経費は、名古屋-仙台間の交通費、5泊6日の宿泊・食事料として 18,000 円と、仙台から宿泊場所までの交通費として 5,000 円の負担が必要であった。

3) 「いわて GINGA-NET」の将来構想

復興支援を通して、学生が自主的に問題を解決していくような仕組みづくりにつなげたい。また他の地域で災害が発生したときに自発的に相互の協力体制がとれる学生同士の連携の基礎を形成していきたい。さらに、被災地にあるボランティア組織として外部からの支援が効率よく被災者に届くよう関係調整を含めて、現状を外に向けて発信していくことが必要だと考えているとのことであった。

4) 「いわて GINGA-NET」プロジェクトへ参加する学生への支援

平成 25 年度 震災ボランティア学生への支援について

●支援の内容

学生がボランティアとして岩手県立大学内にある特定非営利活動法人「いわて GINGA-NET」が主催するプロジェクトに参加する場合の往復旅費を大学が負担する。

また、参加者は各自で寝袋を持参することとなっているため、寝袋を大学が貸し出す。

●支援対象となる GINGA-NET : 日程と募集人数

夏銀河 2013 (8月 21日 (水) ~9月 23日 (月) までの5期) 各期 60名、計 300名

●参加費用

18,000円 (各期一人あたり) は自己負担とする。事前に振込にて支払う。

●宿泊拠点

五葉地区公民館

●活動内容

応急仮設住宅の住民に対して、お茶っこサロン活動、子どもの居場所支援、学習支援を行う。学校に対して、学習支援、イベント支援等を行う。活動中は GINGA-NET が準備する活動報告書を毎日記録して、活動終了後は GINGA-NET 発行の参加証明書を受け取る。

●移動方法

名鉄バスが準備する高速バス (夜行) を利用する。

また、仙台からは GINGA-NET が準備するバスにて宿泊拠点へ向かう。

両方とも大学でまとめて申込み料金を支払う。

●募集方法

ユニバーサルパスポートで全学生へ告知する。参加希望者は GINGA-NET への申し込みを各自で行い、申込フォームを GINGA-NET へメール送信すると共に、メーリングリスト volunteer@nrs.aichi-pu.ac.jp (研究支援・地域連携課とボランティア・ステーションへ同時に配信される) へ「震災ボランティア活動参加申請書」を期限内に提出する。

●大学の支援

学生一人につき1回の支援とし、バスの往復料金を支援する。寝袋を貸出す。

申し込みに基づきボランティア保険の加入手続き及び支払いを支援する。

●支援に伴う学生の義務 参加学生は必ず事前説明会に参加すること。ボランティア活動終了後は、修了書の複写と活動報告書を大学に提出し、報告会に参加すること。

(3) 学内における連携

研究支援・地域連携課は、ボランティアへ参加登録した学生から申請書が提出されると、バスの手配を行い、参加者名を確認した。

学生がボランティアに参加中は、学長室、副学長室、事務部門長室、研究支援・地域連携課、保健室及び電話交換室には名簿を置き、参加学生名の把握と緊急時の対応へ備えた。また、参加学生に対し、各期でリーダーを決め、リーダーは、①出発時 ②仙台到着時 ③仙台出発時 ④宿泊拠点到着時 ⑤宿泊拠点出発時 ⑥仙台到着時 ⑦仙台出発時 ⑧名古屋到着時に、大学 (地域連携・学術情報課) へメール連絡するように依頼した。

参加学生の病気の発症、事故もなく、全員が無事に活動を終えることができた。

Ⅱ-1 復興支援ボランティア説明会の開催

(1) いわて GINGA-NET プロジェクト説明会

<守山キャンパス>

日時 平成25年7月22日(月) 12時15分から

場所 中講義室1 参加予定 4名

<長久手キャンパス>

日時 平成25年7月24日(水) 13時00分から

場所 S棟101 参加予定 23名

【内容】

1. 委員長挨拶 (15分)
2. 夏銀河2013についての説明 (15分)
3. ボランティア活動に参加する上での注意事項 (5分)
ボランティア保険について
寝袋の配布について
バス乗り場の案内
健康管理について
4. 質疑応答
5. 閉会の挨拶 (5分)

【配布資料】

- | | |
|-----|--|
| 資料1 | ボランティア説明会 |
| 資料2 | project2013summer (夏銀河2013案内) |
| 資料3 | 夏銀河2013: GINGA-NET☆FQA _ 活動紹介 _ いわて
GINGA-NET |
| 資料4 | 夏銀河2013に参加するみなさまへ注意事項 |
| 資料5 | 活動報告用フォーマット |
| 資料6 | インターンシップ・レポート |
| 資料7 | グローバルインターンシップ活動日誌 |
| 資料8 | ボランティア保険について |
| 資料9 | 名鉄バスセンター地図 |

今回は5月に設立された、ボランティア・ステーションと一緒に説明会を行った。

募集のポスターなども、ボランティア・ステーションにて作成してもらった。

夏休み！！

震災ボランティア

～いわて GINGA-NET～

2011年3月11日から、もう2年数か月。

ここ愛知県立大学が、岩手県立大学内にある特定非営利活動法人「いわて GINGA-NET」主催のプロジェクトに、ボランティアとして参加を希望している人に**名古屋－仙台間の往復バス代（名鉄バスを利用）を支援**します。

【日時】

第1期	8月21日	(水)	～	8月26日	(月)
第2期	8月28日	(水)	～	9月2日	(月)
第3期	9月4日	(水)	～	9月9日	(月)
第4期	9月11日	(水)	～	9月16日	(月)
第5期	9月18日	(水)	～	9月23日	(月)

【参加費用】 **18,000円**（各期一人あたり）※7月31日までに振り込む

【活動内容】 応急仮設住宅の住民に対して：

お茶っこ等サロン活動、子どもの居場所支援、学習支援、イベント支援、漁業支援等

【宿泊拠点】 住田町 五葉地区公民館

【定員】 約70名

【事前説明会】 長久手キャンパス：7月24日（水）13：00～14：00 S101
守山キャンパス：7月22日（月）12：15～12：45 中講義室1

【申込方法】 UNIPAの掲示板 → 参加申請書をメーリングリストへ送信（7月17日まで）

→ バスとボランティア保険を申し込む + GINGA-NETにて各自で申し込む

質問があれば、ボランティアステーションまで(^o^)/

apu.volstation@gmail.com

Ⅱ－３ 学生ボランティア活動支援の実際

(1) 大学としてのボランティア学生の把握

復興支援委員会では、学生の自主性を尊重した支援方法について議論を重ね、大学が認めた活動（NPO 法人いわて GINGA-NET が実施する活動）に参加する学生へ①交通費の支援、②保険加入の確認、③希望する者に大学の寝袋を貸出すことの三点を実施することにしました。

平成 25 年 7 月 9 日にポータルサイトで全学生に向けて告知を行い、参加希望者はそれぞれの活動参加の申込をしたことがわかる書類を事務局へ提出し、支援を受けることとなりました。

いわて GINGA-NET へは 27 名の申込があり、実際に支援を受けた学生数は、第 1 期 8 月 21 日～26 日 6 名、第 2 期 8 月 28 日～9 月 2 日 6 名、第 3 期 9 月 4～9 日 7 名、第 4 期 9 月 11～16 日 8 名でした。

(2) 参加学生への経済的支援と全学同窓会からのサポート

GINGA-NET プロジェクトへ参加する学生については、仙台までの名鉄バスと仙台から宿泊拠点までのバスを申込みました。

ボランティア保険の加入手続き、寝袋貸出しについても事前説明会において周知をはかりました。また活動の意義を考えることや現地で自分自身の健康と安全に責任を持つことの重要性を理解すること、心身の不調や変化があらわれた場合には速やかに大学の保健室に相談することも伝えました。

経済的な支援として平成 25 年 9 月 18 日に全学同窓会より 500,000 円の寄附をいただき、今回の大学の経済的支援を力強く支えていただいたことに関係者一同厚く感謝の意を表します。

(3) 参加学生氏名

	参加した期	氏名	ふりがな
1	1期	堀田 美月	ほった みづき
2	1期	井口 スハイラ	いぐち すはいら
3	1期	藤吉 美の里	ふじよし みのり
4	1期	坂井 咲妃	さかい さき
5	1期	杉浦 夢菜	すぎうら ゆめな
6	1期	竹村 あゆみ	たけむら あゆみ
7	2期	木下 裕美子	きのした ゆみこ
8	2期	古井 恵美	ふるい めぐみ
9	2期	三宅 真央	みやけ まお
10	2期	中澤 保奈美	なかざわ ほなみ
11	2期	新間 睦巳	しんま むつみ
12	2期	天野 奈美	あまの なみ
13	3期	増田 聖香	ますだ きよか
14	3期	村井 俊介	むらい しゅんすけ
15	3期	伊東 大地	いとう だいち
16	3期	新實 俊樹	にいみ としき
17	3期	幸田 日奈	こうだ ひな
18	3期	渡邊 紗生	わたなべ さき
19	3期	鳥居 春奈	とりい はるな
20	4期	岡川 友奈	おかがわ ゆうな
21	4期	守田 知世	もりた ともよ
22	4期	渡辺 春佳	わたなべ はるか
23	4期	竹内 あゆみ	たけうち あゆみ
24	4期	石橋 加菜	いしばし かな
25	4期	上川 夏林	かみかわ かりん
26	4期	大矢 里美	おおや さとみ
27	4期	羽賀 彩織	はが さおり

Ⅲ 東日本大震災復興ボランティア活動報告

報告会状況

1. 開催日時 : 平成25年12月11日(水) 12時30分～15時
2. 主催者 : ボランティアステーション
3. 会場 : 長久手キャンパス H004
守山キャンパス 小会議室I (TV会議システムにて中継)
4. 参加者数 : 一般と学生と教職員合わせて48名
5. 次第 : 【第Ⅰ部】開会～復興支援委員長 鎌倉先生挨拶～夏銀河2013に参加した学生の発表(看護・1期～4期)
【第Ⅱ部】地域連携センター長 戸田先生挨拶～ボランティア団体の発表(とびねこ→スクールボランティア→リニモ沿線合同大学祭実行委員会→ボランティアステーション)～愛知県立大学全学同窓会 小林会長挨拶～閉会

【会場の様子】



【司会のボランティアステーション代表神戸さん】



【鎌倉復興支援委員長挨拶】



【看護学部の発表 (TV会議にて中継)】



【第1期】



【第2期】



【第3期】



【第4期】



【戸田地域連携センター長挨拶】



【とびねこ】



【スクールボランティア】



【リニモ沿線合同大学祭実行委員会】



【ボランティアステーション】



【小林全学同窓会長挨拶】



夏銀河 2013 & ボランティア活動団体報告会

ひとつでも当てはまったら **GO!**

- 夏銀河 2013 に参加した!
- 震災から 2 年半…今求められているのは何?
- きっかけさえあればボランティアしてみたい!
- 県内にはほかにどんな活動団体があるの?
- 大学生活バイトだけで終わりにたくない!

12月11日 (水) H004 にて

第1部 (12:30~13:55) 銀河 2013 参加報告会
第2部 (14:05~14:55) ボランティア団体による発表

- 活動内容
- 困ったこと、悩んだこと
- 目指すところ etc…

とびねこ

スクールボランティア
リニモ沿線合同祭学祭
ボランティアステーション



お問い合わせはボランティアステーションまで

apu.volstation@gmail.com

Ⅲ-1 参加プロジェクト 夏銀河 2013

<p>看護 グループ</p>	<p>【メンバー】木下 裕美子、 三宅 真央、 中澤 保奈美、 羽賀 彩織</p>
<p>私達は、夏休みの4日間、岩手県釜石市周辺でボランティア活動をしてきました。はじめて東北の町並みを目にし、地震と津波など天災の恐ろしさを目の当たりにしました。震災から2年半も経っているにも関わらず、街には家の土台だけが残っていたり、津波で流されたゴミがいまだ片付けられておらず、まだまだ復興のための支援が必要だと感じました。</p> <p>私達が行った主な活動は、畑仕事と、港で働いている漁師さんの手伝い、仮設住宅での活動などを行いました。そこで、現地の人から震災についての貴重な話を聞くことができ、学んだことがたくさんありました。</p> <p>畑仕事は、被災した3人の女性が運営する大槌町復興農園にお手伝いに行きました。復興農園では様々な野菜を育てて仮設住宅の人に安く売って生活しているそうです。自分たちも被災者であるのに周りの人のことを考えて助けあおうという決意がとても強かったです。わたしたちは耕したり、草をとったりする中で、復興農園のみなさんから、「ボランティアで遠くから毎年来てもらって嬉しいよ。」と言ってもらえて、単純な作業でも役にたてたことが嬉しかったです。</p> <p>港での手伝いは、牡蠣の選別作業を行いました。普通だったら、2日間かかる作業がお手伝いをするだけで、半日で終わらせることができ、漁師さんたちにたいへん喜んでいただき、形に残るボランティアができたとおもいます。作業している間、漁師さんたちとたくさんお話をさせていただきました。港を復興するまで長い年月がかかり、苦しい思いをしてきましたが、漁師という仕事への誇りからみんなで協力しあって、復興しました。震災で職を失って、復帰したくてもできない方々がたくさんいると思うので、そのような人々にも支援の目が向けられるといいなと感じました。</p> <p>仮設住宅での活動は、お茶っこサロンという仮設住宅に住む人々の交流の場を作り、住民のみなさんとゲームをしたりして、楽しめる空間を作りました。家庭訪問では、一人暮らしの高齢者の方の健康状態のチェックを行いました。住民同士のつながりが少ないことに驚きました。</p> <p>ボランティアに行く前、私達は、『もう2年半経ったから、ある程度復興しているだろう。』と思っていしましたが、現地の人々は、まだ支援をしていて、年々ボランティアの人が少なくなっていることを危惧しています。そのため、このように周りの人達に被災地の状況を知ってもらい、伝えていくことが私達にできることだと考えました。ボランティアの形はは様々なのでこの活動で終わらせるのではなく、継続させていきたいと思います。</p>	

銀河ネット 2013年夏 2期・4期メンバー



看護学部

2012511026 木下 裕美子

2012511055 中澤 保奈美

2012511059 羽賀 彩織

2012511087 三宅 真央

被災地の様子



復興がすすんでいない場所がまだまだ多くありました。

家が流され、家の土台だけが残っているところもあります。



釜石市鶴住居地区防災センターへ行きました



津波の被害により
建物の鉄骨がむき出しになっていました。



津波で流されてきたものが
建物の中にそのままの状態
で残されていました。

大槌町役場



津波の被害を受けた当時の
そのままの姿で
残っていました。



復興商店街



復興農園でのお手伝い



花壇をきれいにする
お手伝いも
しました。

おいしいスイカをいただきました☆



菜の花プロジェクト



菜の花の種を
脱穀しました！
脱穀した種は油
を作る原料となり、
商品となった油
は岩手県で販売
されます。





岩手は自然豊かで
空気がおいしく、
とても素敵なところ
でした(≥▽≤)

牡蠣の選別作業



仮設住宅の訪問



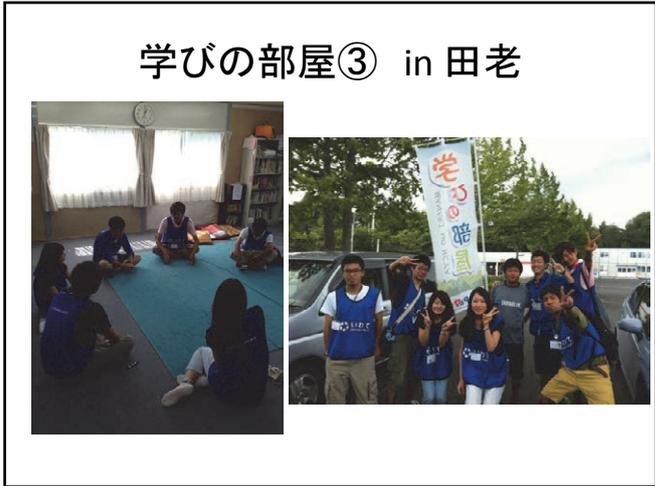
4日間の活動をみんなで振り返りました！
被災地での活動を通してたくさんの方のことを学びました。

＼ご静聴ありがとうございました／



Ⅲ-2 参加プロジェクト 夏銀河 2013

<p>第1期 グループ</p>	<p>【メンバー】堀田 美月、井口 スハイラ、藤吉 美の里、 坂井 咲妃、杉浦 夢菜、竹村 あゆみ</p>
<p>これから第一期大槌金澤班の活動報告をします。私たちは畑での開墾作業と亜麻という植物の収穫のお手伝いをしました。</p> <p>活動場所は星印の大槌町です。私たちの宿泊拠点である住田町から車で約1時間半の場所にあります。</p> <p>活動1日目は、近隣住民の方々と一緒に公民館で染色体験をしました。染色について話してくださった方は、震災後に化学染料で作られた衣類は、原発と同じで環境に悪いことに気づき、日々の生活を見直すきっかけとして染色を始めたそうです。ニュースでは、被災者の困難な様子を見ていたのですが、実際に現地に行くと、新しい活動を始めている人たちの前向きな姿勢を見ることができて、とても勇気づけられました。</p> <p>染色体験の最後には、自分たちで煮出した染料を使って野染めをしました。</p> <p>活動2日目から4日目までは、畑に行き、開墾と亜麻摘みに分かれて作業しました。</p> <p>この写真は開墾チームの様子です。畑作りのために石を拾い、土を柔らかくする作業をしていました。</p> <p>この写真は亜麻摘みの様子です。亜麻とは、右の写真の植物です。私たちにボランティアを依頼した山崎さんという方は、この摘んだ亜麻を繊維にして、かばんなどの商品にしてよくよくは売ることを考えているそうです。</p> <p>畑はとても広く、山崎さん一人では手に負えない様子でした。</p> <p>活動最終日に、山崎さんのご厚意で近くの川に行き、豊かな自然を肌で感じることができました。</p> <p>右の写真が山崎さんです。「ぺっこずつ」という、繊維、染色、植物栽培をする団体の代表をしています。「ぺっこずつ」は岩手の方言で、「少しずつ」という意味です。</p> <p>左の写真は山崎さんのご友人で、畑の草刈りを手伝ってくださった なかいさんです。</p> <p>真ん中の野菜は、ご近所の方が毎日昼食時に差し入れてくださったものです。ご自宅のお手洗いも貸していただきました。このようにいろいろな人の協力のおかげで、無事にボランティアを終えることができました。</p> <p>以上の活動を通して私たちは、様々な支援の形があること、相手のニーズがあって初めてボランティアが成立すること、自分のような何も秀でた才能や知識がない人間にもできることがあることを学びました。</p> <p>私たちは、震災復興ボランティアに行き行って本当に良かったと思っています。ご清聴ありがとうございました。</p>	



視察



田老観光ホテル



奇跡の一本松



ありがとうございました！



作業の様子①



作業の様子②



川遊び①



川遊び②



お世話になった方々



活動を通して学んだこと

- 様々な支援の形がある
- 相手のニーズがあって始めてボランティアが成立する
- 自分にもできることがある

ご清聴ありがとうございました！



<p>第2期 グループ</p>	<p>【メンバー】古井 恵美、 新聞 睦巳、 天野 奈美</p>
<p><活動内容></p> <p>私たち第二期のメンバーは、宮古市を中心に、公民館や中学校の一室を借りて、主に中学生に対して学習支援を行う学習支援チームと、大槌・金澤地区で農園をやられている方々の農作業の手伝いをする畑チームに分かれて活動しました。</p> <p><活動を通して感じたこと・学んだこと></p> <p>今回ボランティアに参加し、たくさんの人たちと出会ったことで、多くのことを考え、学ぶことができました。毎日の振り返りの時間では、チームのメンバーと気付いたことを共有し、そこからまた翌日の活動につなげていきました。全国からの友達、違う視点からの考えを聞き、考えさせられることも多くありました。今回の活動で一番難しかったのは、それが目に見える支援ではなく、心の支援、目に見えない支援だったことです。震災から二年以上経ち、私たちも含め、あの震災によって直接被害を受けなかった人たちは、震災のことがいつの間にか頭から消えていってしまっている時期でした。メディアで「復興、復興」と騒がれなくなり、あんなに大きな被害をもたらした震災だったのに、時と共にその記憶が薄れていくことは怖いと思いました。実際、現地はまだ復興が進んでおらず、瓦礫処理が終わり草が生えている、そんな状態でした。目に見える部分ですらそんな状態で、目に見えない部分は、あの時のまま忘れることはないだろうし、それは時間が解決してくれるような問題でもありません。現地の人たちと関わるうちに、みんながあの震災を経験していて、きっとそれぞれ感じていることはあるのに、そういう気持ちを表には出さず、将来の夢や今の目標に向かって頑張っている姿は本当に強く、感動しました。そういった姿を見ながら活動をしていく中で、最初は自分たちに何ができるのか分からず、自分たちの活動は本当にこれでいいのか不安でいっぱいでした。しかし、多くの人と出会い、その都度たくさんのことを考え、また、「岩手に来てくれただけでもすごく嬉しいんだよ」と言ってくれるあたたかい現地の人たちに支えられながら、この一週間で大きく成長できました。</p> <p>この経験を通して、ただ話を聞くことの大切さ、そして、ただそばにいてだけで安心できることを知り、目に見えるボランティアだけではなく、目に見えない心の面でのボランティアもあるということがわかりました。「ボランティア」は、特別なことではなくて、困っている人がいたら助ける、というような、一見当たり前に思える「人と人との支えあい」のことだと思いました。そのためこれからは、誰かが悩んでいるとき、自分には何もできないんじゃないかと思うのではなく、ただそばにいて、心のよりどころのような存在になれば嬉しいです。最後に、今回岩手に行ったことで、それまで「被災地」だった岩手が、「あの子どもたち、あの人たちがいる岩手」になりました。そんな、会いたい人がいっぱいいる岩手に、また必ず行きたいです。</p>	

ボランティア活動から学んだこと

～ボランティアとは、人と人とのつながり～



天野奈美 古井恵美

ボランティア日程

- 1日目: 沿岸視察(釜石市大槌町)
- 2日目: 宮古市移動、鎌ヶ崎オデッセ視察学びの部屋(津軽石 駒形通公民館)
学びの部屋 青少年ホーム体育センター(サッカー)
- 3日目: 宮古市社会福祉協議会ボランティアセンター視察、パンカフェ、
陸前高田市移動、奇跡の一本松、学びの部屋(高田第一中学校)
住田拠点(五葉地区公民館)
- 4日目: 宮古市移動、学びの部屋(崎山 崎山自治会館)、崎山仮説サロン活動
住田拠点(五葉地区公民館)
- 5日目: 宮古市移動、田老地区震災跡地(田老観光ホテル視察)
学びの部屋(グリーンピア三陸みやこ グラウンド集会所)
住田拠点(五葉地区公民館)

1日目

沿岸視察(釜石市大槌町)



津波 被害の大きさを感じた



2日目

宮古市移動、鎌ヶ崎オデッセ視察学びの部屋(津軽石 駒形通公民館)
学びの部屋 青少年ホーム体育センター(サッカー)



一生懸命な姿に感動



3日目

宮古市社会福祉協議会ボランティアセンター視察、パンカフェ、
陸前高田市移動、奇跡の一本松、学びの部屋(高田第一中学校)
住田拠点(五葉地区公民館)



多くの人が悲しみに負けず
再び前を見つめて歩き出していた

4日目

宮古市移動、学びの部屋(崎山 崎山自治会館)、崎山仮説サロン活動
住田拠点(五葉地区公民館)



外国の方も力になろうと
日本に来ている。



5日目

宮古市移動、田老地区震災跡地(田老観光ホテル視察)
学びの部屋(グリーンピア三陸みやこ グラウンド集会所)
住田拠点(五葉地区公民館)



ほんの少しの変化も、大きな成長に感じた

仲間の輪・絆



1日目

大槌・金澤地区 畑チーム

「耕絲館」ぺっこずつの畑の手伝い
(掘り起し、石拾い、草取り)

→ 重労働
少人数や高齢者の方のみでは大変

- 多くの、若い人たちの協力
- 農業経験者が必要



写真:いわてGINGA-NET HPより

2日目

復興農園でのお手伝い(花壇の草取り、花植え)

- 自分たちの活動を形として残せた→達成感
- あまり話すことができなかった
- 自分たちの方がもてなされていると感じる → どうやって返すか、どれだけ返せるか

課題



3日目

平田第一・第二地区仮設住宅への訪問(草取り・サロン活動)

- 多くの人からお礼の言葉→役に立っていると実感できた
- 交流会に来てくれた方たち
…子供たちからお年寄りの方まで
何度も来てくれる人がいた→楽しんでくれている
⇔ 人数的にはまだ少ない

学生が橋渡し



4日目

復興農園の手伝い(草取り)

- みんなで協力し、成果を残せたことに対する達成感
- 自分から話しかけることができた
- 帰りにお礼の言葉
→役に立てた
もてなされている感→少しは返すことができた実感



まとめ

- ボランティアのカタチは1つではない
 - …目に見えるものだけでなく、目に見えないボランティアもある
- コミュニケーションの大切さ(現地の方・参加した人たち)
 - …楽しいと感じてくれる→ボランティア
つながりをつくることができる
他の人の考えを聞く、自分の考えを話す
→新たな発見、自分の考えが深まる・変化する

ボランティアの輪を
広げよう!



<p>第3期 グループ</p>	<p>【メンバー】 増田 聖香、 村井 俊介、 伊東 大地、 鳥居 春奈 新實 俊樹、 幸田 日奈、 渡邊 紗生</p>
<p><u>農業の手伝い</u></p> <p>当初、震災ボランティアに参加すると決めた時の自分は本当に被災地に対して無知でした。どの程度復興が進んでいるのか、被災者の方々はどのような生活を送っているのか、何の知識もなく東北へと出発しました。</p> <p>現地に到着すると、市街地では震災の面影はあまり感じられませんでした。沿岸部では津波の被害の爪痕が残る役場もありましたが、瓦礫は一か所に集められていて、全体的には、震災の痕跡を彷彿させるものは思ったより少ない印象でした。ここで一週間どんなボランティアをしようかと思っていたのですが、僕は山崎さんという方が管理する畑で農業支援のボランティアをすることになりました。正直なところ、震災ボランティアとしてやってきて、農業の手伝いをするのか、これは震災と関係あるのか、とってしまったのが最初にこのボランティアの担当が決まったときの率直な感想でした。</p> <p>しかし、二日目以降、本格的な活動が始まると、そのような考えは払拭されました。この写真はお世話になった山崎さんとその畑ですが、とても一人で管理できる広さではありませんでした。山崎さん自身被災されたのですが、その後、ぜひ復興に使わないかとある団体から譲り受けたのだそうです。しかし、当初は広い土地は荒れ果て、とても農業ができる状態ではないにも関わらず、税金がかかるという状態だったそうです。震災以降、何とか畑を農業のできる状態にした後も、出荷させる先がなく、作った作物の買い手がいないという状況が続いたようで、最近になってやっと染物の原料となる藍などから、わずかながら利益が出るようになってきたそうです。今年も何とか畑を機能させるために、僕たちは畑の草刈や石取りをしました。東北と言えど、夏の暑さは厳しく広い畑で作業するのは本当に大変でした。</p> <p>現在の東北は、瓦礫処理など目に見える部分では復興がある程度済んでいるのかもしれませんが。しかし、立地条件の悪さや震災以降の若年層の都市部への移動から、深刻な人手不足に陥り、資金面でもかなり厳しいのが現実です。初日に農業って震災と関係あるの？と思っていた自分が1週間のボランティア活動の中で最も印象に残っているのは、活動を共にしたメンバーと行ったミーティングの中で、「してあげるボランティアよりそっと寄り添い背中を押すようなボランティアを」という言葉でした。農業は1週間で結果の現れるものではなくとにかく継続的な活動が必要ですが、山崎さんは「若い人たちがこうして県外から来てくれることで被災地の今を伝えてもらえるし、パワーを感じる」とおっしゃっていました。今こうして自分が話すことも被災地の今を伝えるというボランティアになり、一人でも多くの人が新たに興味を持って東北に赴いてくれることを願って報告とさせていただきます。</p>	

菜の花プロジェクト

菜の花は、被災地の景観を良くするためだけでなく、津波で塩害にあった農地の塩分を吸収する働きがあるそうです。さらに、菜種を絞ってできる菜種油を販売することで雇用も生まれます。菜の花にこれほど多くの働きがあることを知り、驚きました。

私たちは、菜種油をつくる過程である、収穫した菜種を脱穀する作業のお手伝いをさせていただきました。暑い日差しの中、作業自体はチームのみんなと協力してとてもはかどりました。しかし、この活動の中で被災者の方と直接的な関わりをすることはできませんでした。そのことで私を含め、チームのみんなのモチベーションも下がってしまいました。

夏銀河に参加する前、震災から2年半たっている被災地では、がれきの撤去作業などは終わり、問題となっていることは心身のストレスや生活・雇用の不安といった深刻なもので、私たちボランティアができることは、苦しい思いを聞いてあげることなのだろうと思っていました。被災者の方のニーズを知り、それに応えることが少しでも出来たらいいなと考えていました。実際、現地の視察を行ってみると、震災の爪跡を感じさせる建物も多く残っていて、筆舌しがたい光景もありました。がれきはないかもしれないけれど、まだまだ課題が山積しているようでした。だからこそ、被災者の方の顔さえも見えないこの活動は、本当に被災者の方の役に立っているのだろうか、みんな悩んだりもしました。

しかし、この菜種を収穫するまでも、たくさんの人たちがこのプロジェクトに関わっていて、そのつながりがこうして持続的な活動に結びついてきたのだと思うと、人と人のつながりはすごいものだと感じました。また、少し間接的な気もするけれど、こういう支援の在り方もあるのだと思いました。

銀河に参加するまでは被災地のために自分は何ができるのか分からず、行くことさえためらっていました。実際、今回の活動で何ができたというわけではないかもしれませんが、しかし、被災地の現状の一端ではあるけれど自分の目で見たことはとても意味があると思います。被災地として、だけではなく岩手の魅力を感じることもできました。自分が足を運んでみてきた、岩手の今や魅力をたくさんの人に伝えていきたいと思いました。

アッキーチーム

私たちアッキーチームは学習支援を中心にいろんな活動をしてきました。実質5日間の活動日の中で毎日違った地域に出かけて、いろんな人に出会いました。

3日目の活動時に宮古市の視察もして、そのときに立命館大学の人による「記憶の街ワークショップ in 銚子崎」というプロジェクトの制作しているところに立ち寄りました。それは立命館大学の人が中心となって地震や津波の被害により失われてしまった街並みを1/500サイズの白い模型で復元して、その地域の方々と学生が交流しながら少しずつ色を塗っていくというものでした。

町の模型を作り地震や津波を思い出すことは、住民の方々にとって悲しいことや苦しいことを思い出すことになるのではないかと感じていましたが、住民の方々も積極的に学生と関わっているように見えました。

模型を作ることは建築を学んでいないとできないことであり、彼らはまさに自分たちにしかできないことを見つけて支援していました。わたしはこの活動を見て立命館大学の人々が自分たちで岩手まで足を運び、行動していることに感動し、すごいことだと思いました。どこにどんな支援をするか、その地域をよく知っていて、その地域で人とつながりが必要なんだと改めて思いました。

両石漁港

両石は岩手県沿岸部にあり、リアス式海岸を持つ漁港であります。震災の被害は、約9.6メートルある防波堤が津波によって壊されて、漁港あたりにあった家は津波によって流された。

活動は、昆布の加工と港付近の清掃でした。昆布の加工についてですが、収穫した昆布を長方形の形に切り取り、それらを乾かし、乾いた昆布を袋詰めにしていきました。

私たちは他の漁師さんたちのために役に立ちたいということで港付近の除草作業をしました。

あと一つ活動には入らないけど、大きな声であいさつをするということをグループの中で決めました。なぜなら、ほかの漁師さんとなかなか関わりが持てない中で、挨拶をすることで少しでも会話ができるんじゃないかと思ったからです。挨拶の甲斐もあってか次第に漁師さんから話しかけてくれるようになりました。その中の一人の漁師さんが震災の話を聞かしてくれました。方言が多くてよくわからなかったけど、震災がすごかったことは話している姿や声のトーンで感じることができました。

今回、参加してテレビで伝わることのないものを見たり、感じたりすることができました。そして挨拶の大切さを身に染みて理解できました。

夏銀河第三期

増田聖香 幸田日奈 渡邊紗生
村井俊介 伊東大地

岩手県大槌町金澤 農業支援





・資金面での問題

・人手不足の改善



両石班(場所)



被害

- ・約9.6メートルある防波堤は津波によって壊された。
- ・漁港のあたりにあった家は津波によって流された。




活動

- ・港付近の清掃
- ・昆布の加工





夏銀河2013 第3期 9月4日～9月9日

菜の花プロジェクト

菜の花

- ・景観を良くする
- ・塩害にあった農地の塩分を吸収する
- ・菜種油を販売 → 雇用を生み出す

等

・活動 収穫した菜種の脱殻作業のお手伝い



作業風景





感想・まとめ



アッキーチーム

立命館大学による町の模型



パンカフェ





ご清聴ありがとうございました。

Ⅲ-5 参加プロジェクト 夏銀河 2013

<p>第4期 グループ</p>	<p>【メンバー】岡川 友奈、 守田 知世、 渡辺 春佳、 大矢 里美 竹内 あゆ美、 石橋 加菜、 上川 夏林</p>
<p>2年 大矢里美</p> <p>私は昨年も夏銀河に参加したので今回は2回目でした。昨年同様今年ももちろん暗い気持ちになることはありましたが、すこし冷静な気持ちでいられた気がします。ここでは、昨年と比べてこそ気づけたことについてお話します。</p> <p>ひとつめはボランティアの種類の移り変わり、ふたつめは継続のむずかしさです。</p> <p>まずボランティアの種類の移り変わりについてですが、昨年はお茶っこサロンがメインだったのに対して今年は学習支援、漁業支援、畑作業、カフェのお手伝いのように活動の幅が広がっていました。銀河ネット代表の八重樫さんいわく、お茶っこサロンはもういらない(これはコミュニティができたということだから、良いこと)という仮設住宅が増えたため無理やり活動地を探したということらしいのです。「無理やり探す」というのは決してティアはもう必要ないということではありません。若い人が岩手のことを気にかけて来てくれるということで元気づけるためです。お茶っこサロンでは直接、来てくれてありがとうという言葉がモチベーションにつながっていましたが、畑作業は地域の方と話す機会が少ないのでだれかの役に立っているとは実感しにくいという意見もありました。しかし実は私たちが帰ってから近所の方が「今日はいっぱい人が来てたけどどうしたの」とうれしそうにしていたとあとから聞き、まだまだ必要とされていることには変わりないと実感しました。</p> <p>次に継続することのむずかしさについてですが、何年も続けることが難しいというのは拠点でも活動先でも感じました。特に復興農園の山崎さんは、高齢なのに広い畑をほぼひとりで開墾・管理し、支援してくれる会員も資金も足りないのも、もし体を壊したら畑をする人がいなくなって復興農園が続かなくなってしまうと思われまます。正直なところ、このままでは繊維や染料をつくって雇用を生みゆくゆくは製品を販売という夢は半ばで途絶えてしまうという印象でした。荒れて何も植えられない土地からスタートするのもあまりできないことですが、一番の試練はこれからだと感じました。</p> <p>2年 竹内あゆ美</p> <p>今回、初めて東日本大震災の被災地である岩手に行き、3年たった今どのような状態にあるのか見て感じてきました。1日目に様々な場所を視察にまわった際、まだまだ復興は進んでいない、と率直に感じました。マスメディアでは最近震災のことにあまり取り上げられなくなったため、なんとなく復興は進んできているのかなと思っていましたが、それは大きな勘違いでまだまだ助けが必要だと感じました。2日目からは、私はパンカフェチームとして沢口さん夫妻が運</p>	

営する Pan Café でお手伝いをしました。活動を通して、その地域に住むお客さんのみならず、お店に来たほかのボランティア団体の方々ともお話ができ、それぞれの震災や復興にたいする思いが聞けてとても貴重な体験ができました。また、沢口さんからは、現在抱えている問題、例えば、街づくりがすすんでいかないこと、人口が減ってきていること、政府からの援助金が遅いことなど、なかなか聞けないことまで話していただきました。沢口さん夫妻を含め、現地の方々はとても元気で前向きでした。私たちが元気を届けに行かなければならないのに、逆にパワーをもらってしまいました。そのパワーを無駄にせず、東北だけでなく、さまざまな地域にたくさん届けていきたいと思います。

2年 渡辺春佳

私は4日間の活動日のうち、2・3日目に菜の花プロジェクトのお手伝いをしました。菜の花プロジェクトは他の活動とは違って、人と直接関わり合うものではなく、黙々と脱穀や草刈りというような作業を進めていくものでした。よって最初はなかなか誰かの役に立っているという実感がなく、炎天下の中で皆モチベーションを保つのが難しい状況でした。“なぜ自分はこの作業を行っているのか？”正直そんな思いを抱えながらの作業となっていました。その日の夜、プロジェクト代表の山田さんの話が全体であり、しっかりと話を聞き、プロジェクトがどのようなものなのか、自分の活動が何に繋がっているのかをしっかりと理解できました。皆のモチベーションも格段にアップし、知ることがいかに大事か分かりました。その後のミーティングでは、課題や反省点を皆で話し合い、翌日に行かせる様々なアイデアを出し合いました。これによって仲間との絆も深まり、翌日の作業もスムーズにできました。

2日間を通して学んだことは、まず、直接関わらずとも地域の方々は私たちの姿を見てくれるということです。山田さんは近所の人に、「学生さんたちどこから来たの？」「どんなことしているの？」と興味津々に質問されるそうです。そして地域の方々は、私たちが来て作業をしている姿を見るだけでも、“忘れられていないのだ”と安心できるそうです。その背景には、震災から2年半以上が経ち、ボランティアやメディアでの話題がどんどん減っているという事実があります。菜の花の活動を通して得たものはたくさんありますが、最も大きかったのは、間接的にも誰かの役に立てるのだという、新しいボランティアの形を発見できたことだと言えます。

1年 守田知世

私は、震災ボランティアを通して生の状況を自分で見て、テレビなどの媒体から伝わってくる情報とは異なるものを感じた。メディアでは、復興が進んでおり活気が出てきたと報じられているが、実際は、まだまだ津波の後が残っていた。そこには、人々の悲痛の思いが感じ取られ胸が痛んだ。直接的なボランティア、間接的なボランティアなど多くのものを体験したが、実際にわたしたちの満足で終わってしまうのではないかと不安があった。しかし、被災地のために自分ができる少しのことをやるという気持ち、行動が大切なのだと感じた。

この震災ボランティアを通して学んだことを周りの人々に伝え、これから起こる震災への備えをしていきたいと感じた。

2年 上川かりん

私たちアッキーチームは、毎日違う活動場所で活動をしていました。学習支援が主な活動と聞いて参加しましたが、そこで求められていたのは勉強を教えることではなかったように感じます。仮設住宅に住んでいる子どもたちは自分の住んでいるところを、「家」とは呼ばずに「仮設」と呼んでいました。目いっぱい走り回って遊びたい年頃の子どもたちにとって、狭くて音を立てることもはばかれる場所での生活は、相当のストレスになっていると思います。そんな子どもたちが一つの集会所に集まって、同じ年頃の子と交流し、気持ちを安らげる「場所」を提供することは、3年目を迎えた被災地にとって大きな支援になるのではないかと感じました。

また、お母さんたちの手芸教室が行われている集会所にもお邪魔しました。一緒にお話をして、お茶を入れてもらい、最後には「上を向いて歩こう」の歌をプレゼントしました。そのお礼に、と、できたばかりの巾着袋をプレゼントしてくださいました。岩手ではどこへ行っても、何もしていない私たちに、「よく来てくれたね。ありがとう。」と声をかけてくださいました。岩手の暖かさに触れ、「被災地」に住む「被災者」としてではなく、岩手に住む暖かい人々、が大好きになりました。3年たった今、被災地でのニーズは日々変わっていています。その移り変わりを受け止め、これからにつなげていくことがなによりも大切だと強く思います。

最後に、每晚遅くまで一緒に悩み、時には感情をあらわにしながらも日々一緒に活動したアッキーチームの仲間。たくさん悩んだからこそ、深いところでのつながりを築けました。一人では潰れていたかもしれません。たくさんありがとう。この絆も、これから作っていくきっかけになると信じています。

1年 岡川友奈

漁業支援の活動では、作業のお手伝いをしながら、温かく迎え入れてくださる漁師の方々とお話しして交流することができました。はじめは、船が流されてしまったり、漁業場が流されて新しい建物を建てて漁業をしたり、今までの様には生活できていないはずなのに、みなさん明るく生きていらっしゃるという印象を受けました。しかしお話を聞くと、何とかして生きようとしていたら時間がたっていたとおっしゃっていました。「なんとかして」という状況の中で、暗くならず生きていく強さに圧倒されました。

活動を通して最も感じたことは、伝えることの大切さです。東北から遠く離れて住んでいる私たちは、被災地の「今」を適切に知っているでしょうか。復興を進め、困難を強く乗り越えようとしている人々の姿を知っているでしょうか。少なくとも私は、活動をしに行く前と後では印象が全く違います。広く、そして正しく伝えることは、実際に現地に行くことができなくても「何かできるのではないか」という思いを人々に抱かせることとなると考えます。そして、この「思い」は、ボランティアの一步であり、微力ではあっても無力ではないと思います。

1年 石橋加菜

テレビでは被災地について報道されることが少なくなっているので復興は進んでいるのではないかと考える人が多いのではないかと思いますし、今回参加するまでは私もそのように考えている

一人だった。しかし、瓦礫は撤去されているが、家など建っておらず空き地に草が生い茂っていた。私はそのような状態を實際目の当たりにして今の自分には何ができるか、そもそもボランティアとは何かと非常に悩んだ。そのような気持ちを持ちつつ二日間甲子第三仮設住宅を訪問しお茶っ子サロンという住民の方と交流する活動をした。慣れない土地で住むことや住民関係のストレスなど仮設住宅で暮らすうえでの苦労や震災当時のことを話してくださるのを聞いて、今必要とされているのは目に見える支援ではなく心のケアなのではないかと考えた。そして5日間活動する中で、ボランティアとは自分ができる範囲で人々のニーズにこたえることなのではないかという答えにたどりついた。このように私は夏銀河 2013 に参加してテレビを通してではわからない震災の恐ろしさを改めて認識し、今後来るといわれている南海大地震への防災意識を高めるとともに、今後とも積極的にボランティア活動に参加したいという意欲に繋げることができた。

第4期

大矢 里美
竹内 あゆ美
守田 知世
渡辺 春佳
岡川 友奈
上川 夏林
石橋 加菜

金澤チーム

昨年

- ・初対面の人との会話
- ・来る人の固定化
- ・深刻な問題

- ・単純な農作業
- ・人数が多くキャストがいない
- ・振り返りが盛り上がらない



振り返りの改善

小さいグループに分ける



- ・声が聞こえやすい
- ・読み上げるのではなく話し合う時間
- ・気づき、意見を言いやすい

越田鮮魚店



補助は受けない

お客さんが離れていかない
誇り



人をもてなせるようになった
ことが嬉しい

- ・高齢
- ・会員少ない
- 資金不足
- 人手不足
- ・宣伝手段がない

山崎さんが体を壊したら
途絶えてしまう

始めることより続けること
のほうが難しい



☆Pan Café Team☆



活動内容

- ・沢口さん一家が運営しているパン屋&カフェの手伝い
(接客、皿洗い、レジ打ちなど)

初めは...

- ・足手まといにならないか
- ・震災について聞くことによって嫌なことを思い出させてしまうのではないか

なかなか行動できず...

しかし!

徐々に改善!

現在抱えている問題

- ・街づくりが進んでいない
- ・少子化と震災の影響による人口の減少
- ・経済的に厳しい

活動を通して...

- ・実際にきいた話をいろいろな人に伝えていくべき
- ・普段の生活を見直し、なにげないことに対して感謝の気持ちを持つ

平田第2仮設団地



詳細

- ・戸数 123戸
- ・場所 旧県立釜石商業高校グラウンド
- ・高齢者の割合が高い
- ・談話室有り

今の仮設の現状

- ・仮設住宅ならではの問題
- ・自宅再建の遅れ

全体を通して

- ・人間関係の難しさ
- ・子供や動物の存在の大切さ
- ・今後の対策の必要性
- ・生の現場を知らせること



菜の花プロジェクト



初めは...

- 人と直接は関わらず
ひたすら黙々と作業



- 誰かの役に立っている実感がない
 - モチベーションを保つのが難しい
- なぜ自分はこの作業を行っているのか??



代表・山田さんの講演会...



- 壮大なプロジェクトの全体を知る
→活動が何に繋がっているのか理解
モチベーションUP! 知ることの大切さ
- ミーティングで課題や反省点をみんなで話し
合い、翌日の作業に活かす
→絆を深める、作業の効率化

作業2日間を通して...

- 直接関わらなくても地域の人を見てくれる
「学生さんたちどこから来たの?」
「どんなことしているの?」
- 作業する姿を見せるだけでも安心
“自分たちはまだ忘れられていない”
(↑ボランティアの減少、メディアの話題減少)



* 新しいボランティアの形を
発見することができた



漁業支援



- 震災前にはいかない
現状を何とかしようとして
生きる漁師の方々の姿勢
- 震災時の状況、現在の状況
を広く伝えることの大切さ

アッキーチーム



- ・ 崎山仮設
- ・ 田老仮設：日本一の防潮堤



岩手のあたたかさ

子どもたちの笑顔

2013夏 岩手

第4期 アッキーチーム

甲子第三仮設住宅

夏銀河2013.9.14

夏銀河2013.9.15

第2部 ボランティア・ステーション

ボランティアステーション

<ボランティアステーションとは？>

(目的)

- ・学生の自己実現を支援する
- ・大学と地域をつなぐ架け橋になる

(活動内容)

- ・ボランティア情報を収集し、提供する
- ・校内のボランティア団体を繋げていくために交流の場を設ける

(活動報告会を企画するなど・・・)

(運営メンバー)

教育福祉学部4年：梅村まき 松澤みさき

社会福祉学科2年：神戸紗也佳 久納静恵 中道槇子

ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻2年：大矢里美 松浦唯子

ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻1年：石橋加菜 上川夏林

<ボランティアステーションを作ったきっかけは？>

設立メンバーが二年前の夏に参加した“いわてGINGA-NET”の東北復興支援活動に参加したことでした。東北での活動を通してボランティアセンターという組織が現地の大学にあることを知り、この組織が県大にもあったらいいなと感じました。

<ボラステ設立から現在までの活動記録>

5月	22日：開設
7月	24日：いわてGINGA-NET説明会
8月	7日：淑徳大学のCCC（淑徳のボランティアセンター）見学 長久手市役所環境課の人とごみ減量プロジェクトの協力依頼を受ける
10月	毎週水曜日：ごみ減量プロジェクト・報告会についてのミーティング 19日：ごみ処理場（晴丘センター）見学
11月	毎週水曜日：ごみ減量プロジェクト・報告会についてのミーティング
12月	1日：スポーツゴミ拾い 9日：県大・淑徳大学合同ミーティング 11日：2013夏銀河・ボランティア報告会

<ごみ減量プロジェクトとは？>

2013年8月7日に長久手市環境課の方に「長久手市内の学生と協力してごみ減量プロジェクトを推進したい！」と声をかけてもらいました。それがこの活動の始まりです。

協力している大学は、愛知県立大学と愛知淑徳大学です。

私たちはまず、ごみについて理解を深めるために市役所の方と一緒に、ごみ処理場見学をしました。

そして学生にごみに少しでも関心を持ってもらうために何かないかと考えました。そこでご

みの量を競って楽しんでごみ拾いをしてもらおうという意見が出ました。それが2013年12月1日に「スポごみdeながくて」という名で実際に行われました。今後も「ごみ減量プロジェクト」は市役所の方と連携して続けていく予定です。

＜夏銀河・ボランティア報告会とは？＞

銀河参加者は活動内容、参加して感じたことなど発表してもらい、様々な活動団体には活動内容、目的、やりがい、など発表してもらいます。報告会の目的は、お互いの活動を知ること、思いを共有すること、です。また色々な考えを聞いて自分の視野を広げられる機会になれば良いなと思い報告会を開きました。

*ボラステメンバー



*ごみ処理場（晴丘センター）見学



*スポごみdeながくて



*夏銀河・ボランティア報告会



第3部 地域ボランティア報告

I 地域連携センター ボランティア促進プロジェクト

目 的 各グループがどのような活動を行っているかをできるだけ多くの学生に知ってもらうために発表会を開催し、グループ活動への参加者の増員をはかるとともに活動をより発展させることを目的としている。

開催により得られるもの

- ・ 活動グループの増員
- ・ 活動の外部からの評価
- ・ 活動グループ同士の情報共有

発表会 平成 25 年 12 月 11 日（水）12 時半より
グループごとによる報告会
(夏銀河 2013 の報告会と合同で開催)

発表グループ（発表順）

- ① とびねこ
- ② スクールボランティア
- ③ リニモ合同大学祭実行委員会
- ④ ボランティア・ステーション

人形劇サークル

とびねこ

目的

- ▶ 人形劇を通じて子どもたちを笑顔に！

- ▶ どんな活動をしているの？
- ▶ 人形劇はどうやって作るの？
- ▶ 人形劇をしていて感じることは？

どんな活動をしているの？

7月 たなばたまつり



11月 県大祭『とびねこシアター』



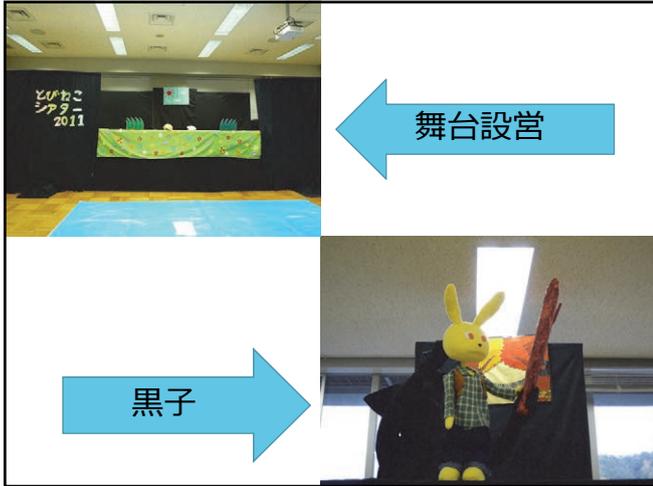
3月 とびねこ祭り



人形劇はどうやって作るの？

人形作り





人形劇をされていて感じることは？

- やりがい
- ▶ 子どもたちが楽しんでくれること
 - ▶ 集中して見てくれること
 - ▶ 自分のやりたいことが出来ること

- 大変なこと
- ▶ 人形製作に時間がかかること
 - ▶ ストーリーを考えること



スクールボランティア報告会

英米学科1年 後藤翔太

1. スクールボランティアとは？
2. 目的
3. 苦悩・乗り越えた方法
4. やりがい
5. 参加資格



スクールボランティア
とは何か？

僕たち**学生**が、**学校**という舞台で授業の補助などの**教育支援**をする活動。

放課に子供たちと遊ぶ



授業後の先生の手伝い

目的

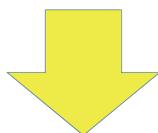


- 授業の円滑化
- 実質の少人数クラスの
実現
- 先生の負担軽減

苦悩・乗り越えた 方法



「受け身」の態度



「能動的」な態度

やいがい



- 廊下等で会ったら、喋りか
けてくれる
- 給食が食べれる
- 先生の気分を味わえる

どういう人が参加
している??



将来、教師になりたいという意志がある人



しかし・・・

やりたいという意志があるなら誰でもできる！！

ぜひ参加をお待ちしています！！！！



リニモ沿線合同大学祭実行委員会 (りにさい)

の

いまとこれから



りにさい

目的: **助けを求め合えるまちをつくる**

メンバー:

13大学 約60人の学生

愛知県立大学、愛知学院大学、愛知淑徳大学、愛知医科大学、愛知工業大学、愛知教育大学、中京大学、名城大学、名古屋商科大学、中部大学、名古屋外国語大学、東海学園大学、専門学校名古屋デザイナー学院

きっかけ

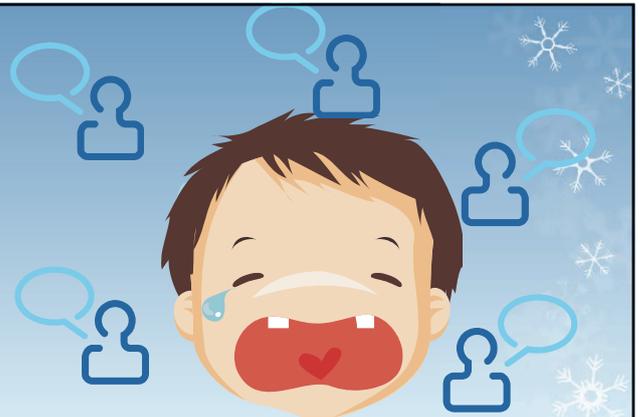
2011.3.11

東日本大震災

日頃のつながり



非常時の助け合い



人を巻き込む力

リニマルシェ

リニモの駅構内で、
地域の団体・お店と協力して開くおみせ



リニモ亭

お店を借り、
みんな
交流をする

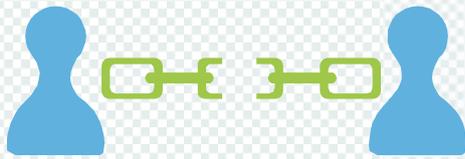


リニモ沿線ミュージアムウィーク



展望*夢

2014年2月16日 リニ祭



りにさい・・・接着剤



ご清聴
ありがとうございました。

ボランティアステーション



ボラステを作った“きっかけ”

- × GINGA - NETを通じてボランティアセンターを知る
- × ボランティアの情報やきっかけを提供する組織が欲しい
- × 学内のボランティアサークル、団体、個人の繋がりを強くしたい



“ボラステを設立しよう！！”

なぜ、活動しているか？

- × ボランティア情報を多くの学生に**提供**するため
- × ボランティアに対する**誤解**をなくすため
(大変そう、ボランティア=福祉分野など)

こんな活動しています！

- × ボランティア情報の**収集・提供**
- × 校内のボランティア団体の**交流の場**を設ける
- × 長久手市・環境課と**ごみ減量プロジェクト**実行



課題

- × ボラステがあまり機能していないことに対する**不安・焦り**
- × 今後のメンバー募集のこと
- × ボラステメンバーが**義務感**で運営している



まだ**やりがい**を感じていないのが本音・・・

これからしていきたいこと

- ＊ ボラステのメンバーが**実際に足を運んだことのある**ボランティアを紹介したい
- ＊ 「ボランティアを探すならボラステ！」と思えるぐらい**ボランティア情報を充実**させる

お問い合わせ先

愛知県立大学長久手キャンパス

〒480-1198 愛知県長久手市茨ヶ廻間 1522-3

TEL 0561-76-8843 FAX 0561-64-1104

E-mail renkei@bur.aichi-pu.ac.jp

愛知県立大学ボランティア活動報告書
東日本大震災復興支援ボランティア
地域ボランティア

編集・発行

愛知県立大学 東日本大震災復興支援委員会

〒480-1198 愛知県長久手市茨ヶ廻間 1522-3

TEL 0561-76-8843 FAX 0561-64-1104

E-mail renkei@bur.aichi-pu.ac.jp